

〔「茶の湯の美術」展によせて〕

双柏文庫の小堀遠州の書状について

双柏文庫とは、歴史学者で、京都女子大学教授や大手前女子大学学長を務めた中村直勝氏（1890～1976）が蒐集した古文書類の文庫名です。大和文華館の理事長を務めた佐伯勇が、旧制第三高等学校の教官をしていた時の中村氏の教え子であった縁から、その古文書類660点余りが大和文華館の所蔵となりました。内容は、社寺や幕府の公文書、宸翰、公家や武家、文化人たちの書状など様々であり、著名な茶人たちの書状も多く含まれています。今回の「茶の湯の美術」展では、双柏文庫より、武野紹鷗や古田織部、千少庵、小堀遠州といった茶人たちの書状をいくつか展示いたします。本稿ではその中より小堀遠州の書状一通（図1）に注目したいと思います。

小堀遠州（1579～1647）は、江戸時代初期に活躍した大名茶人で、徳川将軍や多くの大名などに茶道を指南しました。また、作事奉行として造園や建築にも才能を発揮したことで知られています。

図1に挙げた遠州の書状は、宛先が不明ですが、表具屋に宛てたと考えられる書状です。原文には以下のように記されています。なお、改行は／で示しています。

一此くものしや此一くだり物三ふくの／中につけ可申候上下はちや二一ふく／あさき二ふくいつれ二も

くるし／からす候／いづれも一文字なし／一右三ふくの内／千峯向嶽百川帰海／此一くだり物はさうけのちくを付可申候／是はいそきの物二三日中にてこし可申候／残二ふくハぬりちく也是ハ／当月廿／四五日比ニ出来候へハよく候／念を入可仕候／以上／遠江／又申候かミのよくひつみのなきほどわき／をそろへて置可申候

これに句読点、濁点を付けて読み下し、分かりやすいように仮名を漢字に、或いは漢字を仮名に適宜変更すると、以下ようになります。

一、この雲の紗、この一行物三幅の中につけ申すべく候。上下は茶に一幅、浅葱に二幅、いづれもくるしからず候。

一、いづれも一文字無し。

一、右三幅の内、「千峯向嶽百川帰海」この一行物は、象牙の軸を付け申すべく候。これは急ぎの物、二～三日中に出で越し申すべく候。残り二幅は塗り軸なり。これは当月二十四～五日ごろに出来候へばよく候。念を入れ仕るべく候。以上。

遠江（＝小堀遠州）
又、申し候紙のよく、歪みのなきほど、脇を揃えて置くべく申し候。

内容は、三幅の一行書の表装に関するものであることが分かります。掛け軸の表装は、図2のように、本

紙の上と下に細い「一文字」、その周囲に「中廻し」、さらにその上と下に「上下（天地）」と呼ばれる裂（きれ）をつけます。この書状では、三幅はいずれも一文字をつけないこと、中廻しには雲文の紗を用いること、一幅の天地の裂は茶色、他の二幅は浅葱（薄い藍色）とすること、特に「千峯向嶽百川帰海」と書かれた一幅は象牙の軸とすることが記されています。また、「千峯向嶽百川帰海」の一幅は二～三日中に表装するように頼んでおり、遠州の多忙な日々が窺えます。書状の最後では本紙が歪まないように注意しており、細やかな性格が伝わってきます。

茶人たちは、茶席にふさわしい掛け物や茶入などを選び取りますが、掛け物の表装や茶入の仕覆などにも気を配りました。特に遠州は表装や仕覆の誂えを依頼されたり相談されたりすることが多かったようで、表装や仕覆について記した書状が多く残されています。本書状では、一文字の無いすっきりとした表装を指示しており、上下の裂の色や軸の素材まで丁寧に説明しています。

つづいて、本書状の書風に目を向けてみましょう。記されている字は、大きめで横幅が広く、あまり連綿と続かず一字一字がはっきりしています。これは、歌人として尊敬を集めた平安末から鎌倉初期の公家・藤原定家の書に倣ったものです。遠州は定家を敬愛しており、定家の血筋を継ぐ冷泉為頼に和歌を学び、定家流の書を得意としていました。遠州は、ただ和歌の技法を学ぶだけでなく、茶の湯に和歌の

心を取り入れ、定家の和歌軸を茶会の掛け物として用いたり、茶道具に和歌に因んだ歌銘をつけたりすることを好みました。和歌や王朝美への傾倒は、「綺麗さび」と呼ばれる遠州の洗練された茶風を確立する礎ともなりました。

遠州が歌銘をつけた茶道具の一つに、福岡藩主黒田家に伝来した高取焼「肩衝茶入 銘染川」（図3、個人蔵）があります。「染川」という銘は、『伊勢物語』中の和歌「染川を渡る人のいかでかは 色になるてふことのなからむ」に因んだもので、定家流の書で記された遠州筆の添状が附属しています。高取焼は福岡藩の藩窯であり、二代藩主忠之が遠州と交流があったことなどから、遠州好みの茶陶を多く製作しました。この茶入には、濃い茶色や淡い茶色の釉薬が華やかに掛け分けられています。これと釉調が類似しているのが大和文華館所蔵の高取焼「流釉水指」（図4）です。華やかな釉薬やすっきりと洗練された器形には、遠州の好みである品格のある優美さが体現されているようです。

今回取りあげた遠州の書状を含め、茶人たちの書状は、それぞれの茶に関する思いや美意識、さらには人間性までも伝えてくれる存在と言えます。書状と茶道具を合わせて味わうことで、より鮮やかにそれぞれの茶風を感じていただければと思います。（宮崎もも）

※図2は『日本美術図解事典』東京美術、2004、図3は『大名茶陶高取』福岡市美術館、2005年より転載いたしました。

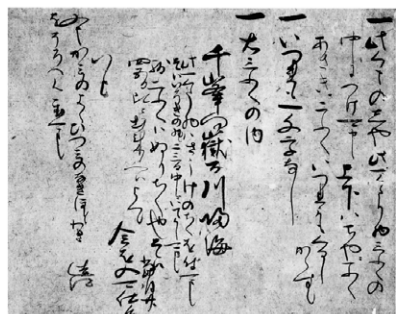


図1

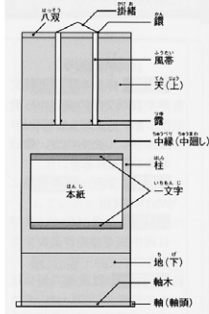


図2



図3



図4

季刊 美のたより No.206

平成31年 4月 12日

発行 大和文華館